
幻想郷征服録

桜三里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷征服録

【Nコード】

N2307BA

【作者名】

桜三里

【あらすじ】

博麗大結界に今日も包まれ、平和な日々を過ごす幻想郷。

しかし弱った妖怪、幻想物を回収する役目を持つ博麗大結界が引き寄せ幻想郷へと至らせた相手は、最悪の災厄だった。

黄金の英雄王ギルガメッシュ。

外の世界と結界により隔離されたその地は、世界全てを所有するギルガメッシュにとつて、所有物ではない。ならば、よかろう。征服王よ、時にはこの我^{オレ}も征服と戯れようではないか。

F a t e / s t a y n i g h t の英雄王ギルガメツシュが幻想入りという誰得な小説です。少しでも楽しんでいただければ。

プロローグ（前書き）

東方モノを書くのは初めてです。感想などお待ちしております

ブローグ

その男は王であり あらゆる者も あらゆる鎖も

Der Mann ist King; wie f?r jede Kette
e Person wie f?r jede Kette

あらゆる総てを持っても繋ぎ止めることが出来ない

Ich kann es nicht damit binden,
auch wenn ich es damit mache,
jedes alles

彼は縛鎖を千切り 枷を壊し 哄笑する世界で唯一の王

Ein K?nig nur in der Welt, von
der er rei?t, und bricht gyve
und Lachen

この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない

Ich habe keine Macht, ihn von
der Welt all jeden Sachen in S
chach zu halten

ゆえ 神は問われた 貴様は何者か

Dann fragte ihn Jesus: Was ist
Ihr Name?

愚問なり 無知蒙昧 知らぬならば答えよう

E s i s t e i n e d u m m e F r a g e . I c h a
n t w o r t e .

我が名は——ギルガメッシュ

M e i n N a m e i s t | g i r g a m e s h

プロローグ（後書き）

元ネタはD i e s i r eのラインハルト・ハイドリヒの詠唱、
レギオン』です。 ㊦

Side ルーミア

人食いの少女は、眼下に広がる霧の湖を見下ろしながら、いつも通り気促に宵闇の中を舞っていた。

この湖は、昼間になると深い霧で覆われる。そして夜になれば霧が晴れ、また朝になれば霧が発生する、という奇妙な性質を持っている。それが何故なのかは知らないし、興味もない。彼女にとってはただ夜の散策で通り過ぎるだけの場所であり、別段興味の対象にはならなかった。

ルーミアは、この時間が好きだった。

闇を朋友とする彼女にとって、太陽の光は大敵である。一日の活動時間を終えて西へと沈んだ太陽と共に、少女の気安い時間が訪れるのだ。わざわざ自分の周囲に闇を発生させずとも、当然のように闇に覆われた空。星々の瞬きこそ存在するものの、その程度の薄い光はルーミアにとって、闇と変わらない居心地である。

この時間は、彼女にとって何の憂いもなく、狩りができる時間だった。闇を恐れる人間へと夜闇に乗じて襲いかかり、その身を喰らいつくすのが彼女にとって、最高の愉悦となる時間だった。そんな風に襲った人間の数が、もうどれほどになったかは分からない。数えたこともないし、数えようとさえ思わない。例えるならば、今まで何度食事を摂ってきたのかを問われたところで、即答できる人間などいないだろう。ルーミアにとって、人間を食った回数というのは、それに似ていた。

だが同時に、ルーミアは知っている。この時間に、彼女の獲物が出歩きはしないことを。

人間は闇を恐れ、妖怪を恐れる。昼が人間の時間ならば、夜は妖怪の時間だ。それを知っている人間は、夜になれば人間の里で眠りに入っている。妖怪であるルーミアは、人間の里に入ることはできないのだ。領域を侵した時に、動く輩のことを考えれば、至極当然な考えですらある。

例えば――人里の守護者と不死鳥の少女。

例えば――博麗の巫女と黒白の魔法使い。

例えば――妖怪の賢者と九尾の狐。

人里へと侵入した時点で、これだけの大物を敵に回すこととなる。それはルーミアのみならず、妖怪にとっては忌避すべき対象だ。間違はなく、殺されるのは自分であると分かるのだから。

だからこそ、ルーミアにとっての獲物は、危険を承知で里の外を出歩く人里の人間か、もしくは、そんな常識さえ知らない外来人か、その程度に限られる。

とはいえ、人里の人間などほとんど出歩きはしないし、もし存在したとしても、大抵は彼女以外の妖怪にとって食われる。この辺りの妖怪は、どいつもこいつも食欲旺盛だ。そんな中でルーミアが先に発見することなど、それこそ稀、というものだ。

だからこそ、ルーミアは別段、狩りの成果を期待して飛んでいたわ

けではない。どうせ獲物は見つからないのだから、夜の散歩程度の気安さで飛んでいただけだ。

誰か友達でも見つければ、適当に雑談にでも興じよう。この時間ならば、蛍の妖怪が夜雀あたりが暇をしているかもしれない。彼女らの根城は、確か竹林あたりだったかな、と適当に向かう場所を決めようとして。

それを。

見つけた。

霧の湖から紅魔館へ続く森。吸血鬼の住まう紅魔館の威光が、その森に住まう者は皆無と言っていい。ルーミアと同じ、人食いの妖怪でさえ住まうことは稀だ。

理由はただ一つ。

吸血鬼の根城近くを人間が通ることなど、皆無であるからだ。

だがルーミアは、見つけてしまった。目を向けてしまった。霧の湖と紅魔館に挟まれた森の、ほぼ中央。

——闇。

闇を操る彼女にとって、ひどく身近な存在。人が忌み、妖が好むもの。

自然、ルーミアの向かう先はそちらへと矛先を変えていた。

まるで、この世全ての悪を内包したかのような、圧倒的な闇。

彼女は、闇を好んだ。

ルーミアの全速でもって、立ち上る闇へと向かう。強大な闇。それこそ、ルーミアの操る闇などお話にもならないほどの、絶対的な闇。それならば――。

喰らえ。

妖怪としての本能が、ルーミアにそう告げていた。

闇の中心へと降り立つ。木々に包まれた森の、小さく拓かれた場所。樹齡が幾らかなど見当もつかない大樹に囲まれた、小さな間隙。

そこにいたのは、男だった。

星の小さな瞬きにさえ煌めく、黄金色の髪。逆立ったそれと同じ色でありながら、それ以上に激しい輝きを持つ儼かな黄金の鎧を纏っている。少なくともこの幻想郷では、あまり見かけない格好。

鋭い眼差しが、ルーミアを見据えた。

「……消えよ」

重く響く、低い声音。その言葉に込められているのは、圧倒的な威圧感。

殺気すら込められた言葉に、ルーミアは息を呑む。

「我^{オレ}は些か機嫌が悪い。その命を散らせたくなくば、疾く消えよ」

これは——王だ。

決定的に存在の次元が違う、絶対的に存在している、王だ。

そう、本能で、理解した。

ごくり、と唾を飲み込む。畏怖すると同時に。恐怖すると同時に。それは甘美な果実を目の前にしたような感覚でもあった。

ただそこに存在しているだけで、漏れ出る圧倒的な闇。

だからこそ、ルーミアの言葉は、発せられた。

「あなたは、食べてもいい人間？」

いつだって、獲物を目の前にすれば告げた言葉。それに対する答えが何であれ、食うことには変わらないのだけれど。通過儀礼のようなものだ。

己が人食いの妖怪であると誇示し。

相手がこれより食われる運命を暗喩する。

いつだってルーミアにとっての獲物は、この言葉と共に恐怖した。あの博麗の巫女と黒白の魔法使いを除いて、誰もが死に恐怖した。

「……ほう」

だが目の前の男は、そう静かに微笑むだけだった。

「我^{オレ}に対してそのような物言いをするとは、人食いの化生は礼儀も知らぬようだな」

「れーぎ？ それって美味しいの？」

「だが、己が武に依ることではしか語る言葉を持たぬ者は、好まぬこともない」

くくく、と男が嗤う。ルーミアの頬を、一筋の汗が流れるのが分かった。

自分では、この男には絶対に勝てない。

本能がそう警鐘を鳴らす。逃げる。そう理性が警告する。この場から離れる。全ての感覚が、ルーミアを追い立てる。

だけれど、知ってしまったのだ。

この、強大すぎる闇を。

「貴様の武がどれほどかは知らぬが、我^{オレ}が少々遊んでやるとしよう」

男が言葉と共に、立ち上がる。ゆらり、と鈍重な動き。しかし、確実に眼差しはルーミアを見据えて。

次瞬。

ルーミアは我知らず、懷からスペルカードを取り出していた。

枚数の提示、カード宣言、スペルカードルールに施されたあらゆる規律を、この場では考えない。あらゆる全ての手段を用いて、あらゆる全ての卑しさを持つて、全力で挑まなければ絶対に勝てない。彼女はそう本能で理解した。

これは『弾幕ごっこ』などでは、決してない。

殺し合い、だ。

「夜符『ナイトバード』！」

スペルカードを叫ぶと共に、ルーミアの前方に弾幕が伸びる。翼のように左右へと弾幕を展開し、逃げ場を奪うスペル。煌めく紫と青の弾幕が展開されるも、目の前の男は特にどうということもなく、変わらず面倒臭そうに前髪へと手櫛を入れるだけだった。

「ふむ、さすがは童女といえ化生といったところか」

男はそう呟くと共に、右手の指を弾く。それと共に、確実に男を捉えていたはずの弾幕が。

「……え？」

捻じ曲がった。

まるで物理法則を無視しているかのように、直線で向かっていったはずの弾丸が、男へ当たることを避けるかのように、曲がってしまった。ナイトバードにそんな効果はないし、付加した記憶もない。それなのに。

「さて、どうやら後の世では『絶対不^{アスピス・ヘバイトス}落の砦』などと大仰な名を付けられているらしいが、我^{オレ}にとつては所有物の一つでしかない神代の盾よ。神代より伝わりし盾の前で、貴様の弾丸など塵芥にも等しいぞ、雑種」

男がその右手に携えている、小さな丸盾。まるで時代に合っていない、青銅でできたような盾。神にも等しいほどの——圧倒的な存在感を持った、大盾。

それが男の周囲に不可視の結界を張り、弾幕を全て、捻じ曲げたということ。

ルーミアは混乱した。そんな能力は、聞いたことがない。弾幕とは耐えるものでもなければ防ぐものでもなく、躲すものだ。弾くものでもなければ捻じ曲げるものでもなく、避けるものだ。

そんな常識など、一切が通じない。

「あ……あ……げ、月符『ムーンライトレイ』っ！」

ばら撒く小さな弾丸と、中央に走る光線。いくら不可視の結界といえ、威力だけならばムーンライトレイの方が高い。ルーミアはそう信じて、破壊力だけならばどのスペルにも勝る、それを放ったはずだった。

「ふむ、月光か。悪くはない。もつとも、偉大なる我^{オレ}にとっては月の光すら足りぬ。我^{オレ}を照らしたいと言うならば、太陽を持ってくるがいい」

だがそれでも、男はただ平然と、ただ超然と、そこに立っていた。

信じられない——その思いに、体が震える。

いつか戦った、博麗の巫女。いつか戦った、黒白の魔法使い。どちらも強かったし、ルーミアは勝つことができなかった。

だがルーミアは思う。確かに博麗の巫女も黒白の魔法使いも強い。だけれど。

この男ほどに、圧倒的な力があつただろうか。

「余興は仕舞いか？　では我^{オレ}も、財を幾つか見せてやろう」

同じように、右手で、指を鳴らして。

「『^{ゲートオブバビロン}王の財宝』」

男の背に、数多の神剣、聖剣、神槍、聖槍、古今東西あらゆる神話に登場する、一振りだけで世界の命運を変えてしまえるほどの幻想を持った、武器が。

一斉に、その矛先をルーミアに向けた。

Side 博麗靈夢

博麗神社の夜は早い。もっとも、それに対して確たる理由があるというわけではない。

単純に今代の博麗の巫女、博麗靈夢の寝る時間が早い、というだけだ。幻想郷というのは娯楽に乏しく、頼んでもいないのに勝手に持つてくる迷惑天狗の作った新聞くらいしか暇潰しの道具はない。そして靈夢は、八割方が主観で書かれた新聞を、貴重な油を使ってランプを灯してまで読む趣味はない。

つまり、暗くなれば眠る。明るくなれば起きる。それがこの博麗神社の主、博麗靈夢の生き方だった。

そして今日も同じく、いつも通りの時間に床につき、いつも通り眠りについた、はずだったのだが。

不意に、神社の縁側の扉が開く音がした。

物盗りにしては、自分の音を隠していない。つまり、見つかったところで問題のない相手だということだ。もっとも、靈夢ならばいくら音を隠したところで、気配で察するのだから意味などないのだが。

布団に包まったままで目を開き、考える。

第一候補、黒白の魔法使い、霧雨魔理沙。

恐らくこの神社に訪れる人間で、最も頻度が高い相手だろう。厄介なトラブルメーカーであるも、どこか憎めない彼女は、何故かよくここに入り浸る。

だがそれも、時間を考えてのことだ。わざわざ霊夢が眠りについてまで、ここに入り浸るほど魔理沙は迷惑な輩ではない。もしも魔理沙だとするなら、何かの事情を抱えていると考えた方がいいだろう。

第二候補、小さな百鬼夜行、伊吹萃香。

魔理沙と同じく、この神社に入り浸る酔いどれ少女の鬼である。いつもふらりとどこかへ出かけていって、同じくふらりとまた戻ってきては酒を飲む、という生活だ。

考えられるとすれば、ふらりと神社へ戻ってきたはいいものの、夜であるため家主である霊夢のことを考え、縁側にて一人手酌で月見酒でも楽しんでいる、といったところか。悪酔いすれば、霊夢が起こされて付き合わされる可能性もある。もつとも、あの鬼が悪酔いしている姿など見たことはないのだが。

第三候補、神隠しの主犯、スキマ妖怪、八雲紫。

幻想郷でも最古参の妖怪で、幻想郷を覆う博麗大結界の維持を行う大妖怪。その实力は幻想郷全ての实力者の中でも五指に入り、特に『境界を操る程度の能力』という反則じみた能力がそれを示してい

る。

まあ霊夢にとつては、ただの胡散臭い妖怪に過ぎないのだが。幻想郷の危機に異変解決へと迅速に乗り出す以外は、式神に任せきりで寝てばかりのグータラ妖怪だ。もしも今訪れた相手が紫ならば、それこそ大問題が発生しているとみていいだろう。

さて、霊夢に思い浮かぶ候補は、それくらいのものだが。

願わくば、少々微睡んでいるため、寝所に入ってこない程度の用件であつてほしい。

そんな願いは、叶わなかったけれど。

「……霊夢、起きなさい」

意外な人物の来訪などは当然なく、それは第三候補、八雲紫の声だった。

思い切り溜息を吐きたかったが、堪える。魔理沙の持つてくる厄介事程度ならば、まだ良かった。悪酔いした萃香が無理やり酒に誘つてくる程度ならば、まだ良かった。

この時間に、八雲紫がここを訪れる。それは、すなわち。

幻想郷の、危機を示しているのだから。

「……何よ」

起き上がる。紫はいつも通りの名前と同じラベンダーのドレスを纏い、夜だというのに日傘を片手に枕元に立っていた。体は睡眠を欲していたが、それでも紫を無視するわけにはいかない。

幻想郷の危機とすら呼べる状況に、博麗の巫女である霊夢が動かないわけにはいかないのだから。

「あんたが神社に来るなんて、珍しいわね。賽銭箱は表にあるわよ。でも参拝は、できれば昼間にしてほしいんだけど」

「……火急の用件よ」

霊夢の軽口を受け流し、紫は重々しくそう口を開く。

その表情に浮かぶのは、痛々しいほどの絶望感。幻想郷でも圧倒的な力を持つこのスキマ妖怪の、このような姿を見たことはない。

つまりそれだけ——事態は切迫しているということだ。

「博麗大結界は、外の世界で弱った妖怪を幻想郷に保護する、という目的もある……なんて、あなたは言わなくても知っているわよね？」

「……当たり前でしょ。今更、私に博麗大結界の講釈をしに来たわけ？」

「靈夢……どうやら今回、博麗大結界はとんでもない輩を引きつけてしまったみたいなのよ」

とんでもない輩——その言葉に、思わず靈夢は息を呑む。

この幻想郷に存在する実力者は、それこそ強者に満ちている。例えば目の前のスキマ妖怪であったり、冥界の死を操る亡霊であったり、紅の館に住む吸血鬼の姉妹であったり、蓬莱の姫君とその従者であったり、竹林の炎を操る不死鳥であったり、山の上の神社を司る二柱の神であったり。

地底には核熱を操る鴉も一騎当千の鬼もいる。人里には半人半獣の歴史喰らいもいる。人里近くに最近越してきた寺には、毘沙門天の使いと自称する者までいるのだ。

それだけの実力者が並んでいる幻想郷において、八雲紫が言う『とんでもない輩』。

つまり——それ以上の実力を持つ、博麗大結界の危機となりえる存在、ということ。

「……そいつ、何者よ」

「外の世界で、全てを統べていた王。あらゆる財宝は彼の所有物で、あらゆる人間は彼の支配にあった。人は彼を、こう呼んだ」

八雲紫はそこで言葉を切り、苦々しく唇を噛みながら、ゆっくりと告げた。

「英雄王——ギルガメッシュ」

02（後書き）

この物語の主人公はギルガメッシュですが、ギルガメッシュ視点にはなりません。基本的には東方キャラの視点になります。

03（前書き）

説明回です。説明長すぎてダレるかも

Side 博麗靈夢

紫からそのように言われた靈夢にできたのは、精々小首を傾げるくらいのものだった。

「……ギルガメッシュ、って言われてもね。何それ、新種の亀？」

「今は冗談を言っている場合じゃないわ、靈夢」

軽口で流そうとしてみたが、変わらず紫の表情は硬い。靈夢にはただ、溜息をつくことしかできなかった。

時間も憚らずに人の寝室を訪ねてきて、しかも語り口が冗長である割に火急の用件だとか、冗談を言っているのはそっちじゃないのか、と対する言葉は幾つかあったけれど、呑みこむ。

「はぁ……大体、そんな危険な外来人が来たってんなら、あんたがどうにかすればいい話じゃない。わざわざ私の所に話を持ってこないでよ」

その代わりに口から出たのは、そんな言葉だった。

八雲紫という一種一代の妖怪は、それだけの力を持っている。

有無を言わず、そのギル亀とやらを自分のスキマに放りこんで、そのままの世界へと捨てればいいだけの話だ。紫にとっては、大した苦勞でもないだろう。

それなのに、わざわざ霊夢の所にまで話を持ってくるといふ行為が理解できない。

「私も……そう思っていたわ」

だが——それに答えたのは、紫の沈痛な面持ちだった。

「とんでもない奴が来た、そう思って、幻想郷の平和を第一に排除しようとした。私のスキマへと、永遠に封印するつもりだった」

そう言つて、紫は右手の扇子を開く。同時に、くぱあ、と空間が裂けるように、彼女の『スキマ』が現れた。

八雲紫の持つ通称、『スキマ妖怪』の語源である——あらゆる距離、時間、法則を無視する空間、スキマ。

「でも、できなかった」

最強とさえ、言っていない能力なのに。

「いえ、違うわね。正確には、ギルガメッシュへとスキマが到達することはなかった。私から何度干渉しても、一定距離へと近付いた時点で能力が掻き消されるのよ」

スキマが到達することなく、打ち消される。

つまり。

「……結界みたいなもんを張ってるわけ？」

「と、いうよりは常時開放型の能力と言った方がいいかしら。博麗大結界が、ギルガメッシュに対して何らかの能力を与えたものと思われるの」

「能力、ねえ」

幻想郷に暮らす者は、大なり小なり能力を持っている。霊夢の『主に空を飛ぶ程度の能力』、紫の『境界を操る程度の能力』をはじめとして、その種類は様々だ。中には紅魔館の吸血鬼のように、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』、『運命を操る程度の能力』などといった物騒なものまである。

まあ、人里に暮らす一般人なんかは『竈の火がいつでも点けられる程度の能力』、『明日の天気に分かる程度の能力』、『どこに居ても南が分かる程度の能力』などといった、戦いには一切使えない微妙

すぎる能力を持ち合わせている場合が多いのだが。

たまにやってくる外来人は、とんでもない能力を持っていることが多いと聞くが――。

「恐らく……いや、間違いないわね。ギルガメッシュの能力は、『王である程度の能力』よ」

「はあ？ 王である程度の能力？」

思わず霊夢は首を傾げる。『あらゆる干渉を打ち消す程度の能力』とかならばまだ分かるが、『王である程度の能力』というのは、あまりにも具体性がない。

しかし、紫の面持ちはふざけているような様子が欠片もない。心底本気で言っているのだろう。霊夢にはどうにも、その『王である程度の能力』の恐ろしさとやらが理解できないのだが。

「ええ……『王である程度の能力』。つまり、その存在そのものが『王』なのよ。王様というのは、基本的には一番偉いでしょう？」

「うん」

それは、霊夢も否定しない。幻想郷に王というものは存在しないため、その偉さとやらがいまいち理解できない部分はあるけれど。

霊夢にとっての王という存在の認識は、「まあ、偉い人なのよね」程度だ。

「一番偉い人物である王は、その行動を誰にも邪魔されない。つまりこれが能力の拡大解釈結果として、『王であるがゆえにあらゆる干渉を拒絶する』ということが起こっているのよ」

「……なるほど。だから紫のスキマが近づけないわけね」

「ええ。私のスキマは、それこそ『干渉』そのものだから」

「でもそれだと……弾幕も効かないことにならない？ あらゆる干渉を拒絶するんなら、攻撃こそまさに最大級の干渉じゃない」

もしも弾幕が効かないとなれば、それこそ最強だ。絶対に勝てない。霊夢はそう考えて、背筋が寒くなる。

「……いえ、恐らく、攻撃は効果があるわ」

「なんでよ？ あらゆる干渉を拒絶するんでしょ？」

「確かにその通りだけど、それはあくまでも能力の拡大解釈なのよ。例えて言うなら——紅魔館のメイド長は知っているわね？」

「咲夜？ あいつがどうかしたの？」

思いもよらない名前に、思わず霊夢は眉を寄せる。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。『時間を操る程度の能力』という反則的な能力を持ち、一流のナイフ投げの腕を持つ。それでいて吸血鬼姉妹に対するメイドとしての奉仕も完璧だとか。一家に一人欲しいメイド、と評判である。

「あの子は……年をとらないわ」

「は？ 何言ってるのよ、咲夜は人間よ？」

「『時間を操る程度の能力』を持つということは、決して『時間を止める』『時間を動かす』『加速させる』『減速させる』、くらいしかできないわけじゃないわ。『時間』とは人間で言うならば『加齢』、つまり年齢ね。『時間』を操ることができるということは、つまり『加齢』も操ることができる。これが能力の拡大解釈よ」

「……あんたは真面目に説明するつもりがあるの？」

さっぱりわからん、とでも言いたげに、肩をすくめる。

紫は呆れたように嘆息して、「つまりね」とまだ説明を続けるつもりらしい。いい加減説明ばかりで飽きてきた、と霊夢は口を尖らせる。

「ギルガメッシュの持つ『王である程度の能力』の拡大解釈として、『あらゆる干渉を拒絶する』という結果を生み出した。けれど、そ

れはあくまでも拡大解釈であって、能力から産まれた二次的な副産物みたいなもののよ。ギルガメッシュの本来の能力が『王である程度の能力』である以上、博霊大結界によって定められたスペルカードの攻撃は、『干渉』と認識されない。分かった？」

「……ウン、ワカッタ」

もう疲れたため、そう霊夢は紫に生返事を返す。紫はなんとなく訝しむ目で霊夢を見てきたが、特に何も言ってはこなかった。

「まあ、今回は別にいいわ。改めて明後日の昼間、博霊神社を使わせてもらっわよ」

「……なんでよ？」

唐突な話題の変換に、思わず霊夢はそう反応してしまう。

「なんでって、分かってるでしょう？ ギルガメッシュの存在は、幻想郷にあつてはならないもの。だけれど、私一人の力じゃ倒せそうにないし、幻想郷の実力者に渡りをつけて、全員でどうにかして倒そう、っていう作戦なんだけど」

「……あいつらが動いてくれるわけ？」

霊夢は、これまでの異変で色々関わった連中の顔を思い出す。

うん、どいつもこいつも我侭放題かつ自分勝手の自己中だ。とてもじゃないが、紫を中心とした統率的な行動なんて取れるわけがない。

「…………そこは、私がどうにかするわ」

が、紫には勝算があるらしい。

霊夢にはとても思い浮かばなかったが、その代わりに嘆息を返す。

「まあ、分かったわ。それじゃ明後日の昼間、使いなさいよ。その代わり、お茶は出すけど出廻らしになるし、茶菓子なんて出さないわ。もし欲しいなら、自分で持ってきてきなさい」

「…………何か買ってから来ることにするわ」

ふふっ、と紫が笑う。そしてそのまま、唐突に出てきた空中の裂け目に、吞まれていった。

03（後書き）

オリジナル宝具解説

『アスベス・ヘパイトス
絶対不落の砦』

ギリシャ神話に登場する鍛冶の神、ヘパイトスが作り上げた青銅の盾。

『イリアス』においてアキレウスが使用したため、『アキレウスの盾』という名前の方が有名。

真名開放をせずとも、常時一定範囲内に結界が形成される。ただしヘパイトスが作り上げ、アキレウスが使用する『以前』の原典であるがゆえに、本来の『アキレウスの盾』よりもその結界の力は弱い。本物の『アキレウスの盾』は盾自体にアキレウスの不死性が付与されているため、壊れることがない。

宝具解説していなかったので一応。

04（前書き）

若干グロ注意

タグにR - 15を追加しました

Side ルーミア

圧倒的すぎる力だった。

空中から唐突に現れた数多の聖剣、魔剣の類に、ただひと振りだけで歴史を変えてきたような武器の数々。その全てがルーミアを刺し、貫き、掠め、突き立てた。

ヒュー、ヒュー、とくぐもった声が、喉から漏れる。その体に四肢は既になく、出来の悪い人形のように転がっている。右腕は粉々に千切れ、左腕は皮一枚で辛うじて繋がっており、左右の足は爆ぜて消えた。それでも、ルーミアはまだ死んでいない。

本来ならば一撃で巨人すらも塵殺できるであろう宝具の射出をその身に浴びながらにして、それでもまだ、生きていた。

「ほう、まだ生きておるか雑種」

金色の男がルーミアに近づき、そう薄笑いを浮かべながら言う。
る。

本来ならば、ルーミアは死んでいる。

四肢を失うまでもなく、最初に放たれた宝具の二、三本目で、ルー

ミアは既に死んでいただろう。

そんなルーミアが生きているのは、ひとえに博麗大結界、スペルカードルールのおかげだった。

枚数の提示といった細かい点については省略したものの、ルーミアは己のスペルカードのみで勝負を行った。そして博麗大結界は、スペルカードルールで戦う以上はそこに死者を出さない。だからこそ、ルーミアは生かされているだけだ。

「^{オレ}我の財をあれだけその身に受け、未だ生きているとはな。化生といえ、その生命力は評価に値する。褒めてつかわす」

どこまでも傲慢に、男はルーミアにそう告げる。

だけれどルーミアは、そんな男の言葉に、胸が張り裂けるような思いを得た。己が、この王に認められた——それだけで、死を待ち動きを悪くしようとしている心臓が弾んだ。

何故、とルーミアは思う。

現在半殺しにされ、そして遠くない未来殺されるであろう相手に、遥かな天空から見下されながらお褒めの言葉をいただく——そんな現状に、ひどく興奮している自分が理解できない。まるで、それが。

——嬉しい、みたいに。

「武辺の化生よ、名を聞こう。我に名乗ることを許す」

「……るー、みあ」

そんな男の言葉に、ルーミアは喉から声を絞り出して応える。決して男は、ルーミアに強要をしたわけではない。声を出すことすら全身が痛むような現状、名前など答える必要なんて一つもなかった。

だけれど、答えなければならぬ、そう思ってしまった。

「ルーミアか。覚えておくぞ、雑種」

どくん、とまた心臓が跳ねる。ルーミアはただ名前を呼ばれたただけだというのに、激しい昂りが心を染めていた。

もっと言葉を聞きたい。もっと近くにいてほしい。もっと名前を呼んでほしい。

そう考える反面、違う感情がそれを制止する。

言葉をいただけるなど勿体無い。あまりの気高さに近寄ることすらできない。名前を呼ばれるなどあまりに畏れ多い。

だつて、彼は。

その男は、王であるのだから――。

「さて、一体ここは何処だ。英霊の座に帰るものであると考えていたが、受肉をしている存在は英霊の座に戻らぬということか。全く、まさか最後にあのフェイカーが足掻いてくるとは……」

虚空を睨みつけながら、そう呟く男。

その言葉の内容など何一つ分らない。だけれど、ルーミアは思った。この王は、幻想郷の人間ではない。つまり、外来人だ。

ならば――。

「待……っ、て」

ルーミアに背を向けようとした男を、そうか細い声で制止する。

小さな声ではあったが届いたようで、男は足を止め、そのまま首だけでルーミアを振り返った。

「何用だ、雑種。我^{オレ}を呼び止めるとは、不敬であるぞ」

「……わた、しは、るー、みあ」

「貴様の名は先程聞いたはずだ。いつ我が同じ質問をした」

「あなた、の、家臣に、して、くだ、さい」

そこまで言い切って、ごほごほつ、と咳き込む。口の中を、金臭い血の味が占める。これが人間のものであるならば甘露なのだが、生憎自分の血に対して美味いと思えるほど、ルーミアは変わっていなかった。

男は、そんなルーミアの言葉に眉を寄せる。

「ふむ。そのような半死人の身で我が臣下にあることを望むか。しかし雑種よ、我は弱い家臣などいらぬ。貴様を拾ったところで、最早命は保つまい」

「死、にま、せん……」

相変わらず咳き込みながら、ルーミアはそう男に告げる。この男が手を貸してくれるならば、ルーミアは即座に回復する自信があった。だから、ルーミアは懇願する。

「わた、しが、死、ななかった、ら、家臣、に……」

「ほう。しかし、その状態からどのように生き返るつもりだ？ 我^{オレ}の持つ治療薬をくれてやっても良いが、それでは賭けになるまい。良からう、家臣のおらぬ王というのも張子の虎よ。貴様が見事生きのびることができたならば、我が一の家臣としてやろう」

「な、ら……」

それを指さそうとして、手がないことに気付いて、思わず苦笑した。意識が朦朧としている。早く伝えなければ、手遅れになるかもしれない。既に四肢を失って、随分な時間が経っている。下手をすれば、このまま死んでしまう羽目にもなりかねない。

だから。

「わた、しの、リボ、ン、を、外……して」

それを、示した。

「リボン？ ふむ、その程度の用事にこの我^{オレ}を使おうとは、雑種とは思えぬほどに面の皮が厚い。しかし、貴様の腕を無くしたのもまだ我^{オレ}だ。此度は我^{オレ}の手を煩わせることを許す」

男が膝を下ろして、ルーミアの頭にある、リボンに触れようとする。それと同時に、ぱちっ、という静電気のような音。

「ふむ」と一言呟き、男が手を引っ込める。

「はず、せ、ない……？」

「巫山戯るな雑種。この我^{オレ}に出来ぬことはない。ふん、まさか封印——しかも、これほど強力な呪いの封をされているとは思わなかっただけだ。この程度、我が財をもつてすれば容易く解除できる」

そう男は言って、何もない空間から、歪な形をした短刀を出した。

全く戦闘には向いていなさそうな、何かの儀式に使われるような、紫色の短刀。男はそれを軽く手先で弄び、そして、ルーミアに向けて。

振り下ろした。

思わず、ルーミアは目を瞑る。その短刀の切っ先は、ルーミアに刺さることなく、ただそのリボンだけを切った。

どくん——どくん——ルーミアの体に、止めどなく力が溢れ出す。

あふれ出た妖気は闇となり、その四肢を形作る。肩までしかなかった髪は腰元まで伸び、そして全体的に幼かった体が、相応に成長し

てゆく。まるで早回しのように行われるその光景を、男はまるで余興の一つであるかのように、腕を組んで見ていた。

「……ふう」

体を再生し、全身を全盛期の姿に戻したのちに、ルーミアは軽く前髪をかき上げた。

服装は普段と変わらないものの、完全にその身に纏う雰囲気は、ルーミアのそれではなかった。むしろ、もっとおぞましい何かであるとさえ言っている。

「ふむ、なかなか良い余興であつたぞ」

「……こっちは、体の再生に必死だったんだけどさ。まあ、いいか。お陰様で封印が解けたよ、ありがとう」

「なに、我が臣下のことだ。臣下を氣遣うこともできずして、王は名乗れぬ」

男はそう言って、態度を変えない。大抵、封印される前のルーミアを見た人間は、悲鳴を上げてどこかへ逃げていつてしまうのだが。

だから、そんな男の態度は、ルーミアにとって好感の持てるものだった。

「では、改めて」

す、とルーミアは頭を下げて、片膝をつく。

それは、騎士が王に忠誠を誓う所作。

「我が名はルーミア。王、あなたに忠誠を誓います」

「ルーミア、貴様の忠誠を受け入れよう。我が名はギルガメッシュ。貴様の王となる者だ」

そうして幻想郷に、一組の主従が誕生した。

04（後書き）

カリスマA+の本領発揮のギル様です。

呪いの類のようなカリスマということで、『特に理由はないけど忠誠を誓う』みたいなことが頻繁に起こるのではないかと考えてルーミアを臣下に入れちゃいました。

EXルーミアについて。

作者の捏造です。だけどルーミアって実はすごく強いと思う。闇を操るわけだし。

それからEXルーミアがよく持っている剣ですが、あれについても勿論あります。勿論宝具です。もう少ししたら出ると思います。

「是非このキャラを臣下に加えてくれ！」ってゆーリクエストがありましたらどうぞー。よほど無理なキャラじゃない限りはリクエストにお答えします

Side ミステリア・ローレライ

ミステリア・ローレライは、時折竹林で屋台を営んでいる。八目鰻の蒲焼きと酒を提供し、ミステリア自身は人食いの妖怪であるものの、その屋台を営んでいる限りは人間を食べないと決めていた。その営業努力に本人の料理の腕もあってか、最近では妖怪のみならず人里の人間も飲みにくる程度には認知されている。

夜半。

最後の客が帰り、これ以上営業しても新しい客は来そうにないな――と暖簾を下ろそうとした、その時に。

妙な客が来た。

いや、ミステリアの屋台には、妙な客ばかり来るのだが。例えば食べるだけ食べて飲むだけ飲んだ拳句に颯爽と去ってゆく黒白の魔法使いとか。金払え。あと例えば食べるだけ食べて飲むだけ飲んだ拳句に何事もなかったかのように去ってゆく紅白の巫女とか。金払え。ちなみに二人揃って現在は入店禁止である。

そんなミステリアをして、『妙な客』と言わせるのは、勿論理由がある。

一人は、知り合いだ。知り合いのはずだ。

昨日まではつけていたはずの赤いリボンを何故か外し、幼い容姿が成長して妙齡の女性と言える姿になっている、宵闇の妖怪ルーミア。「そーなのかー」と笑顔で言ってくるのが特徴だったはずの彼女は、何故かそんな雰囲気など何一つ持たない、何かおぞましい妖怪にでも変化したかのように一変している。

そして、もつと妙なのはその連れだ。

黄金の鎧に身を包み、また同じく黄金の髪を逆立てた、男である。ミステリアも幻想郷で暮らして長いが、このような男は見たことがない。容姿もそうであるが、同じくその身を包んでいる、淀んだような闇そのものも。

「いらっしやいませー」

まあ、妙であろうと変であろうと注文して金さえ払ってくれるならば、ミステリアにとってはいいお客様である。ひとまず七輪に炭を追加して、うちわで扇ぐことにした。

「夜中にすまないね、ミステリア。もう閉める頃だろう？」

「うっん、いいよ。それよりご注文は？」

「ん。私は八目鰻の蒲焼きを二つに、冷酒を一つ。王、どうされま

すか？」

注文に、ミスティアは七輪の上へと串に刺した鰻を載せる。だが同時に、ルーミアの口調に違和感を覚えた。まるで子供を相手にしているかのように、どうにも幼いのがルーミアらしさだったのだが。

まるで身体的のみならず精神的にも成長しているかのように、本当に別人ではないかと思えるほどに、ルーミアらしくない。

そして何より、そのルーミアが、連れを『王』と呼んでいるのだ。

王という苗字なのか、と一瞬思うが、まさかそんなことはあるまい。疑問が頭を巡るが、特に気にしないことにしてミスティアは冷酒を注ぎ、ルーミアの前に出す。

「ふむ。では店主よ、この店で一番高いものはなんだ？」

「……はあ。うちは八目鰻の蒲焼き一本でやってますんで、八目鰻の蒲焼き以外は出ませんけど。酒ならこの前、人里の老舗の酒蔵から仕入れた一級品がありますが」

「ではそれを疾く出せ」

「はい。少々お待ちください」

偉そうな客である。ミスティアは別に、『お客様は神様です』という妙な宗教は持ち合わせていない。むしろ『お客様は金様です』と

いった方が正しいと考えている。まあ、とはいえこちらが店で向こうが客である以上、そんな対応も仕方ないのかもしれないが。

先日仕入れた一級の酒、『伊森蔵』をグラスに注ぎ、七輪に新しい鰻を乗せて酒を出す。

「蒲焼きはちよいとお待ちくださいな」

「ああ、ゆつくり待つよ。さて……王、まずは乾杯といきましょうか」

「うむ、良かるう。新たな臣下と盃を交わすというのも、悪くはない」

チン、とグラス同士を合わせて、それぞれ一口飲む。『伊森蔵』はそれなりに強い酒なのだが、男は特に気にしていないように、一気に煽った。

「ふむ。王の飲み物としては些か安物だが、このような屋台だ。仕方があるまい」

「それは……王、申し訳ありません」

「なに、安酒とて時には悪くない。店主、もう一杯用意せよ」

空になったグラスをミステリアに出してくる。ミステリアは小さい

ため息と共に、「はいな」と受け取ってもう一杯注いだ。一応、ミステリアの店では一番高級な酒なのだが、これ。

蒲焼きが焼き上がり、二人に出す。あとはまあ、酒の席で盛り上がる二人を、隣で聴きながら話を振られれば入る程度だ。

どうせ今日は、この二人で店じまいだろう。ミステリアはそう考えて、グラスに『伊森蔵』を注いだ。せつかくだし、ちよつと一杯飲んでみよう。

「さて……王。これからどうなさいますか？」

「ふむ。どう、とはどういう意味だ？ ルーミア」

「いえ、この地の支配に乗り出さないのか、ということです」

「ふん、諫言には耳を傾けるのが王たる者の務めであるが、そのよ
うな戯言はどうでもよい。元より我は王、この我の総べておらぬ地
などなく、我はどこにいたところで王であることに変わりはない」

なんか目の前ですごい会話が行われていた。

ルーミア、何に毒されちゃったんだろう、と友人が心配になってくるミステリア。というか、本当に目の前にいるのがルーミアなのかどうか疑問にすら思えてくる。

「とはいえ王、ここは幻想郷。この地に王はおりません」

「何を言うか。我^{オレ}は世界を統べし王。それは極東のこのような大地でも変わらぬ」

「ここが結界によって外の世界と隔絶された場所だとしても、ですか？」

冷酒を口に含みつつ、ルーミアは男に対してそう言う。ふむ、と男は考えるように顎に手をやった。

「どういうことだ？ ルーミア」

「王は世界を統べし偉大なる王です。ですが、この地は外の世界より隔絶され、千年以上も経ています。今や里人も、偉大なる王が存在することなど覚えておりますまい。この地は結界により隔絶された瞬間に、王からの統制を拒絶したようなものです」

「……成程な。つまりこの幻想郷という地には、我が威光は届かぬということか」

「は。ですので是非、王にはこの地を支配していただきたい所存です」

ミステリアには全く理解できない会話を続ける二人。いや何考えてんの幻想郷の支配とか。というかルーミア、そんな野望持ってたっけ？

男は小さく嘆息して、そしてグラスに入っている酒を一気に煽った。

「良かろう。その諫言、受け入れようぞ」

「ありがたき幸せにございます、王」

「この世の全ては我が物と考えておったが、我が威光の届かぬ地が存在するというならば、それも一興というものよ」

くくく、と男は笑う。まるで、この世全ての悪を内包しているかのような、底知れない闇を抱えて。

「ならば、良かろう。征服王よ、時にはこの我^{オレ}も征服と戯れようではないか」

05（後書き）

カリスマA+の扱いについて。

呪いのようなカリスマということですが、誰しもがかかるわけではなく、力の弱い存在や十把一絡げのような妖怪については有効ですが、それなりに強力な妖怪や人間に対してはそこまで効果がありません。

傷ついて力の弱ったルーミアはギルガメツシュに心酔しておりましたが、EXになった現在は心酔というより忠誠という感じです。一度忠誠を誓ったから、誓い続ける、みたいなイメージで。

ちなみにみすちーは力が弱っているわけでもないのに、ギルガメツシュに心酔しません。死にかけたらするかも。

Side ミスティア・ローレライ

酔っ払いの戯言としか思えないような会話が、今まさに目の前で繰り広げられている。今日最後の客だというのに、ミスティアは頭を抱えなくなった。頼むからそんな物騒な話は、自分の屋台以外でしてほしい。もしも偶然にどこかのスキマ妖怪でも通りがかったらどうするつもりなのだろう。

しかし、そんなミスティアの思いは知られることなく、何故かルーミアが端を開いた幻想郷征服計画が、着々と進行していく。

「それでルーミアよ。この地を我が支配^{オレ}することは吝かではないが、現在は誰がこの地を治めておるのだ？」

「……特に、誰が治めている、ということはありません。幻想郷は様々な強者が、好き勝手に根城を作って好き勝手に振舞っているのが現状です」

「ふむ。つまり戦国の世ということか」

いえ、全然違います。ミスティアはそう突っ込みたかったが、巻き込まれるのが嫌なので極力話しかけないようにした。

スキマ妖怪さん、もしここを通りがかったとしても、私は無実です。何一つ関与していません。だからどうか助けてください。ミスティ

アは酒を飲む手も止めて、そう祈ることしかできなかった。

「では質問を変えよう。どのような強者がいるのだ？」

「それが、王。申し訳ありません。何分、私はつい先程まで何も考えずに動いておりましたので、幻想郷の力関係についてはあまり詳しくないのです。ですので」

なんだか、嫌な予感がする。

こういうのは、何故か当たるのだ。リグルでもないのに虫の知らせというのもおかしな話だけれど、そういうのに似ている。

ルミアが、ちらりとミステリアを見やり。

「ミステリア。君なら詳しいだろう？ 王に少し、幻想郷における勢力図について説明してくれないか？」

ああ——やっぱり。思わず頭を抱えそうになるが、抑える。

どうか神様——（山の上の）仏様——（人里近くの寺の）スキマ妖怪様——（実はこれが一番怖い）、私は無実です。ただ情報をよこせと言われるから喋るだけです。

「……別に、あたしはそこまで詳しいわけじゃないんだけどさ」

「何言ってるんだミステイア。前に言ってたじゃないか。色々と幻想郷の実力者たちが店を覇にしてくれるから、妙に情報通になっちゃった、って」

どうしてそんなこと覚えているのさルーミア、とジト目で睨んでみる。

「ほう、ならば丁度良い。では店主、我にそれを教えることを許す^{オレ}」

そして何故、この男はこんなにも偉そうなのだろう。はあ、と小さく嘆息して、ミステイアは諦めた。

どうせミステイアが喋らずとも、誰かが教えるだろう。どうせ遅かれ早かれなのだから、ミステイアが罪には問われまい。

「……あたしもそんなに詳しいってわけじゃないんですけどね……
やっぱり一番は、博麗神社ですかね」

「ほう、博麗神社とは？」

「妖怪退治を生業にする、幻想郷で異変が起こればすぐにでもそれを鎮めに行く、という幻想郷でも最強と名高い人間、『博麗の巫女』がいるんですよ」

ミステリアの脳裏に浮かぶのは、札を構えた腋巫女、博麗霊夢。

あらゆる異変を解決し、暴れる妖怪を打ち倒す博麗の巫女。ミステリア自身も、一度異変で相對したことがある。とんでもない勘の良さと天性の戦闘センスにより、低級の妖怪など物の数にもせず、異変では吸血鬼や神を相手にしてすら勝利したとか。

「ふむ。魍魎魍魎が跋扈したこの地で、最強と名高い人間か」

「ええ……まあ、あたしもそこまで知っているわけじゃないですけどね。それから次に、やっぱりお山の上の神社ですね。守矢神社ってんですけど、そこには二柱の神様がいるんですよ。一人は戦いの神様で、もう一人は崇りの神様だとか。外の世界では、相当に神格の高い神様だったみたいですね」

闘神、八坂神奈子と崇神、洩矢諏訪子。

ミステリアは噂でしか聞いたことがないが、二人の能力は『乾を創造する程度』と『坤を創造する程度』だと聞いた。乾坤とは八卦において天地を意味し、そういう意味では彼女らの能力は、二人合わせて天地を創造する、という非常に神様らしい能力である。

しかし、その言葉を聞いた男は、ふん、と鼻息荒く眉根を寄せた。

「所詮はたかが神だ。恐れるに足らん」

「はあ……。んであとは、やっぱりスキマ妖怪の八雲紫さんですか

ね。聞いた話じゃ幻想郷の統括者で、博麗大結界で幻想郷を覆ったのも八雲さんだとか。式には九尾の狐もいるらしいですし、本人も相当強いって聞きます。それに白玉楼っていう、冥界にある屋敷に住んでいる亡霊の姫様とも仲が良いとか聞きますし、その気になれば幻想郷を支配できる立場にあるんじゃないですかねえ」

常に日傘を差している姿が思い浮かぶ、紫のドレスに身を包んだ八雲紫。

微笑みを浮かべている姿を遠目で見たことしかないが、あまりの恐ろしさにミステリアは戦おうとさえ思わなかった。単純な強さのみならず、その不気味さ、そして、その底知れなさは妖怪からしても恐ろしい。

男はそんなミステリアの言葉を、ふむ、と顎に手をやって聞くだけだ。

「あとはここ……迷いの竹林の奥に、永遠亭って薬屋さんがありますね。あそこにいる人たちとはあたしも面識ありますけど、月から来たとか聞きました。特にあそこの姫さんと従者の薬屋さんは不老不死らしいですし、強さもかなりのものだとか」

蓬莱の姫、蓬莱山輝夜と、月の頭脳、八意永淋。

一応迷いの竹林を根城としているミステリアは、何度か輝夜と、もう一人の蓬莱人が殺しあっている姿を見たことがある。腕が千切れても即座に繋がり、頭が吹き飛んでもすぐに生える、そんなありえない光景をなんとも見てきた。

「まー、あとは人里近くのお寺さんは、相当強い聖人さんを筆頭とした武闘派集団だとか聞きましたね。それに人里にも半人半獣の守護者さんがおりますし、ああ、あとは三途の川の向こうに閻魔様と死神、それから空には天人、地底には地霊殿つてところがありますね。このへんについては、あたしはあんまり知らないもんで」

列举していくミステリアに、ただ黙して考えている男。

ミステリアはそこで、おっと、と思い出した。どこよりも目立つというのに、言うのを忘れていた。

「あとは精々、霧の湖を超えた先にある紅魔館ですかね。あそこの当主さんが、『悪魔の王』つて名高いレミリア・スカーレット……」

そこでミステリアは、激しい殺気に言葉を失った。

思わず、息を飲む。とてもではないが、まともに呼吸することすらできないほどの強烈な殺気。それは目の前——黙して何も言っていなかった、その男から発せられた。

「……まさか、この地にも王を名乗る不屈き者がいるとはな」

くくくつ、と男は笑う。底知れぬ沼のような、まるで人間の心のよ

うな、暗く深い闇を孕んで。

ルーミアが、隣で微笑んでいた。まるでその闇こそを、己の伴侶だとでも言うかのよう。

ミスティアには、何も言えなかった。ただ、目の前の男に——王に、畏怖していた。

「我が我^{オレ}以外に王と認める相手は、この世にただの一人だけよ。そして、奴がこの世におらぬ以上は我^{オレ}以外の誰も王を名乗ることは許さぬ。おい店主、名を名乗れ」

「ひつ！？ み、ミスティア・ローレライですっ！」

そんな男——王の言葉に、思わずミスティアは名乗る。王は、まるで新しい玩具を手に入れた子供のよう、ひどく楽しげに笑いながら。

「そうか、ミスティアよ。我が名はギルガメッシュ。疾く、我^{オレ}をその不届き者の住まう地へ案内せよ」

こくこく、とまるで糸の切れた操り人形みたいに、ミスティアは頷いた。

そんなミスティアの態度に、王——ギルガメッシュは、鷹揚に頷いて。

「我^{オレ}以外に王を名乗る不届き者は、我が手で誅殺してくれようぞ」

06（後書き）

と、いうわけで今後の方針は紅魔館攻めになります
臣下にしたいキャラなどありましたらリクエストどうぞー。

Side 博麗靈夢

博麗神社は珍しいことに、賑わっていた。普段は参拝客など誰一人来ることなく、ただ無闇に落ちてくる葉っぱを竹箒で掃き続け、飽きたら縁側でお茶を飲むという霊夢の日常にとって、非常に珍しい日である。

もつとも、それが参拝客であり賽銭の一つでも寂しい賽銭箱に入れてくれるのならありがたいのだが、残念なことに今日集まっている面々の目に、賽銭箱なんて映っていない。

博麗神社の、いるかいなか分からないような神様に祈りを捧げるような奴は、この場にはいないからだ。

「今日は、突然の招集に応じてもらってありがとう」

博麗神社の広間。霊夢一人で暮らしている神社にある部屋の中で、最も広い一室だ。たまに起こった異変の後など、ここで宴会をすることが多い。

しかし、残念ながら本日は宴会などではなく、それぞれ参加者の前に出されているのは茶と茶菓子（紫が持ってきた）である。そして宴会のように誰もが笑っているわけではなく、全員その表情は硬い。

上座に座っているのは、八雲紫。そして同じくテーブルを囲むのは、幻想郷屈指の実力者とも言える七名だった。

「……おほん、幻想郷に先日やってきた男、ギルガメッシュへの対策を練るために、あなたたちに集まってもらったのよ。まず、説明をさせていただきますわ」

す、と右手を上げた紫の近くで、両端をリボンで結んだ裂け目――スキマが現れる。

そこに映るのは、黄金の髪を逆立て、また同じく黄金の鎧をその身にまとった、男。その男に跪くのは、同じく鮮やかな金髪の女性か。女性の服がえらくボロボロであることが気にかかるが、それ以外には特筆することもないような絵である。

「まず……この男、ギルガメッシュは、放っておけば幻想郷の危機とすらなる者。私、八雲紫は、幻想郷を統括する者として速やかな排除を行いたいと考えているわ。しかし残念なことに、この男の持つ能力――『王である程度の能力』により、私のスキマでは干渉ができないの。そこで、あなたたちには私に協力してもらって、対ギルガメッシュへの――」

「……解せないね、八雲」

紫の言葉を遮ったのは、赤い服の胸元に鏡を備え、頭に注連縄を巻いた紫の髪の女性、八坂神奈子。妖怪の山の上、『守矢神社』に住まう神の石柱である。

顎に手をやって紫を見るその姿は、決して好意的なものではない。それはこの場にいる、誰もが理解できること。

「一体どうかしたかしら？　八坂の神様」

「そのギルガメッシュっていうのは、外来人だろう？　そんな相手にどうして、私らが連合を組む必要があるのさ。幻想郷の危機って言われても、あたしらは新参でね。よく分からないんだけど」

「……ギルガメッシュは、幻想郷を破壊する力を持っているわ。『王である程度の能力』であるがゆえに、『あらゆる干渉を拒絶する』という副産物を得た彼に、博麗大結界の隔離は通用しない。つまりギルガメッシュは、幻想郷を自由に出入りすることができるし、下手をすると博麗大結界が壊されることになるかもしれないのよ」

「でもだからといって、殺す必要はないのではないか？」

紫の言葉に反論したのは、別の声。

紺のワンピースのような服に、同じ色の帽子をかぶった白髪の女性、『人里の守護者』として有名な半人半獣、上白沢慧音。人里で寺子屋も営んでいる彼女に、そんな簡単な人殺しというのは、やはり耳に障ったのだろう。

「そのギルガメッシュという男は、今のところ何もしていないのだから？　ただ幻想郷に來ただけだというのに、來ただけで殺すというのもどうかと思うぞ八雲紫。そうでなければ、いつも言っている『

幻想郷は全てを受け入れる』という言葉撤回すべきだ」

「あら。『何もしていない』ことが即ち免罪符になるわけではないでしょう?」

そんな慧音に反論をしたのは、また別の声。

こちらは薄い水色の和装に身を包み、同じ色の帽子に死装束の『天冠』と呼ばれる三角の頭巾をあしらった、冥界・白玉楼の主にして亡霊、西行寺幽々子。

「未来がある存在である以上、そこには幾つもの分岐があり幾つもの未来があるわ。その分岐の一つが、幻想郷の完全壊滅という最悪の未来でないとは限らないでしょう? 未然に防げる災害があるというならば、それを防がない手はないわ」

「……私は反対ですね。例えばどのような悪逆無道な者であれ、必ずや改心する機会はあるはずです。それを連れ立って殺しにかかるなど、人の道に反するでしょう」

幽々子の言葉に反論を返すのも、また別の声。

仏道を謳う者でありながら、どこか西洋の宗教服のようなものを身に纏い、紫の髪が肩のあたりから金色に変わっている、という変わった髪色の女性、人里近くの『命蓮寺』の主、聖白蓮。

「最悪の未来があると言うならば、そこには最良の未来も存在することでしょう。貴方の仰ることはまるで、将来的に人殺しになる可能性があるから赤子を殺せ、と言っているに過ぎません。そしてそのような非道なことは、誰もしないでしょ？」

「確かにその通りね。永遠亭は聖さんを支持します」

白蓮の言葉に賛同するのは、また別の声。

中華風の服の半分を青、半分を赤、というどこか奇妙な配色に染めた、銀髪を後ろで三つ編みにした女性、『永遠亭』の薬師にして月の頭脳と称される、八意永琳。

「私はあくまで薬師だけど、医という道で考えるならば聖さんの意見が真つ当に正しいわ。それに我々はあくまで薬屋。荒事は専門外よ。もしも連れ立って殺しに行く、なんて結果になったとしても、永遠亭は不参加を表明します」

「その通りですね。我々命蓮寺も不参加を表明します。そのような不義の戦いをするつもりはありません」

「不義だか何だかは知らんが、守矢神社も参加しないよ。そんな外来人一人に対して集団でかかるほど、神は外道あたしらじゃない」

「はあ。なんだか流れ的に乗っておきましょかね。妖怪の山も不参加を表明しましょう。天狗はもともと、山以外に興味のない連中が多いものですから。ああ、一応今回の招集におきましては、天魔様から全権を委任されております射命丸です」

永琳、白蓮、神奈子と不参加を表明し、さらに続いて妖怪の山の烏天狗、射命丸文も不参加を表明した。

「……く。よ、よく考えなさい！ ギルガメッシュは、博麗大結界すら打ち壊す可能性を持っているのよ！ もしもその力が大結界に向けられたら、幻想郷は終わってしまう！」

「紫、無理よ。もともと、幻想郷は誰もが好き勝手にやるのが当たり前でしょ」

はあ、と溜息をついて、霊夢は紫をそうたしなめる。元々上手いくとは思っていなかったが、当然のように予想通り、協力的な勢力なんて白玉楼くらいだった。まあ、幽々子が紫の友人だからだろうけれど。

「くっ——こ、紅魔館はどうなのかしら。十六夜咲夜、だったかしら？」

「今回の招集、主の名代として参りました十六夜咲夜でございます」

す、と行儀良く一礼するのは、メイド。上下共にフリルをあしらったミニスカートのドレスに、さらにフリルをあしらったエプロンをつけている。どこからどう見てもまごうことなきメイド、紅魔館の『完璧で瀟洒なメイド』十六夜咲夜。

「今回、私は主——お嬢様より、お言葉をお預かりしております」
頭を上げて、特に何の感情も見せず、紫を見る咲夜。その表情にも、やはり感情はない。

その形の良い唇が動き、鈴の鳴るような声で、至極なんでもないとのように、咲夜は告げた。

「『紅魔館は一切感知しない。幻想郷が壊されることになったならば、それは貴様らの弱さが原因だろう。この紅魔館はそのような外来人を相手に連合を組むほどに落ちぶれてはいない。例えその者に攻められたとて、返り討ちにしてくれる』との仰せです」

そうして、幻想郷の実力者を集めた会議、ギルガメッシュ対策会議は。

誰の賛同も得られぬままに、解散の運びを迎えることとなった。

07（後書き）

まあ、幻想郷の好き勝手やってる人たちが簡単に結束するわけないですよー、という話です。

Side 魂魄妖夢

幻想郷の実力者がそれぞれ博麗神社に集まった会議に、妖夢は参加していなかった。

それも当然である。会議を行っている広間にいるのは、それぞれ幻想郷の実力者かその名代としてやってきた者たちで、妖夢は西行寺幽幽子に仕える従者に過ぎない。主である幽幽子が会議に参加している以上、妖夢のような従者がそこに入るべきではないのだ。

それゆえに、縁側でやや退屈しながら待つ。会議を行っている広間とは襖一つ隔てただけであるため、内容を聞こうと思えば聞けるのだが、わざわざ盗み聞きのような悪趣味な真似をするつもりはないし、どちらにせよ幽幽子が教えてくれるはずだ。もしも教えてくれないならば、それは妖夢に知る必要がないだけのこと。どちらにせよ、従者である妖夢が口をはさむべき問題ではない。

白玉楼に戻ったら、庭の整備をして、それから幽幽子の食事を用意して——ああ、煮物ができるまでに少し時間があるから、寝所の掃除をしておこう、などと考えていると。

唐突に、広間の襖が開いた。

どこかど、どことなく不機嫌そうな面々が出てくる。守矢神社の八坂神奈子、人里の上白沢慧音、永遠亭の八意永琳、烏天狗の射命

丸文、紅魔館の十六夜咲夜。

それぞれ、幻想郷の実力者とその名代だ。

妖夢は彼女らの歩みを邪魔しないよう、端に寄る。かといって、頭を下げるわけでもなければ声をかけるわけでもない。妖夢がその頭を下げる相手は、主である西行寺幽々子だけだ。いくら幻想郷の実力者だといえ、妖夢が頭を下げる必要はあるまい。

不機嫌な面々がそれぞれ、博麗神社から出てゆく。

どうやら、会議は失敗に終わっただけらしい。妖夢が聞いていたのは、『幻想郷にやたら危ない奴が来たから、全ての勢力を集めて連合を組み、撃退をするための会議』である。そもそも幻想郷で好き勝手にやっている彼女らが、何の利もなく動くことはないだろう、と従者という立場を弁えず予想はしていたのだが。

「待たせたわね、妖夢」

襖の向こうから、ようやく主である幽々子が顔を出した。

妖夢は居住いを正し、頭を下げる。

「お疲れ様でした、幽々子様。会議はいかがでしたか？」

一応、そう聞いておく。出てきた面々から、予想はできていたけれ

ど。かといって予想だけで判断し、主からの下知を聞かないのは従者としてありえないことである。

幽々子は、小さく微笑んで。

「ええ、上手くいったわ」

と、まるで予想と正反対のことを言ってきた。

出てきた面々の表情から察するに、明らかに失敗に終わったと考えていたのだが、それは妖夢の勘違いであつたらしい。一体どうやってあのような面々を、何の利もなく動かすことができたのか気にかかるが、それは従者としての本分を超えている、と判断した。主である幽々子が会議に出て、そして会議は何事もなく成功を収めた。従者たる妖夢が考えることなど、それだけでいい。

「それは重畳でございます。では幽々子様、白玉楼へ戻られますか？」

「ええ。早く帰って妖夢のご飯が食べたいわ」

「承知いたしました。腕によりをかけて作らせていただきます」

「うん。じゃあ、その前に」

と、幽々子は襖の向こうを振り返って。

「紫、今回みたいなことは、もうたくさんよ。明らかに向こうの言
つてたことの方が正論なのだから、無理に押し通すような会議はや
めてちょうだい」

「それは悪かったと思っているわ、幽々子」

襖の向こうからそう声をかけるのは、八雲紫。幽々子の友人であり、
たまに白玉楼へやって来ることがあるため、妖夢にも面識がある。

もつとも、向こうは大妖怪であり幽々子の友人であり、自分はその
従者である、ということを考えて会話をしたりすることはないけれ
ど。

うふふ、と小さく幽々子は微笑んで。

「まったく、誰から見ても交渉失敗にしか思えないのにねえ。まさ
かあの面々も、考えてはいないでしょうね。既に紫の掌の上だなん
て」

「あら、人聞きが悪いことを言わないで頂戴、幽々子。私はあくま
でも、可能性を提示して危険を警告した。それに従わなかったのは
向こうなんだから」

「もしも、何の利もなく従うような物好きがいたらどうするつもり
だったの？」

「それはむしろ願ったりだったわよ。『駒』は多ければ多いほどい

いわ。例え前に一步進むことしかできない歩兵であっても、壁としては使えるわ。それに、進んでいけばいずれは金になる。そうならばもっと、使い勝手が良くなるでしょうね」

「何事も将棋のようにいくとは限らないわよ？ 紫」

「あの盤面は世界の縮図よ。少なくとも、私はそう信じているわ」

うふふふふふ、と紫の幽々子、それぞれの笑い声が重なる。

それで会話は終わり、とばかりに幽々子は顔を背け、歩きだした。

「それじゃ妖夢、帰りましょうか」

「はい。今晚のお食事は何がよろしいですか？」

「そうね。じゃあ、久しぶりに肉じゃがを作ってもらえると嬉しいわ」

「承知しました」

紫と幽々子、二人して何かを企んでいる。それは妖夢にも分かる。

だけれど、それだけだ。分かったところで、妖夢には何もするつもりはない。何を企んでいるようにも、何を考えているようにも、妖夢はただ従っただけだ。例えそれが悪であれ、破滅への道であれ、主と共に殉じる覚悟を持ってこそ、真の従者であるのだから。

さあ、今は過ぎ去った会議のことなど、考える必要はない。

今晚の味噌汁には何を入れようか——そう考えて、妖夢は幽々子と連れ立って博麗神社を後にした。

08（後書き）

はい当然、老獪……ゲフンゲフン、聡明な紫様は考えなしなんかじゃありませんよー。

さて、フランを臣下にするについて賛否両論あるようですが、皆様はどうお考えでしょうか？ よろしければアンケートをお願いします

A・臣下にしない。フランとギル様のガチバトル

B・臣下にする。フランの力をギル様側で振るう

C・むしろもう幽閉され続けていいんじゃない？

感想の後ろにA B C書いてくださいなー。

Side レティ・ホワイトロック

どうしてこうなった。レティの脳裏に浮かぶのは、そんな言葉。

いつも通りに霧の湖で、成り行きで保護者みたいになってしまった氷精、チルノが遊んでいるのを眺めていると、突然やってきたのは顔見知りの少女。

いや——顔見知りだと思ふ少女、と言うべきか。

宵闇の妖怪、ルーミア。

以前からチルノとミスティア、それにリグルを加えてよくチルノと遊んでいた妖怪である。彼女らの住処はここより大分離れているはずだが、何故か馬が合うのか一緒に遊んでいる姿を何度か見たことがある。

しかしそれは、あくまでも少女であつたルーミアだ。目の前にいるルーミアは、格好こそ以前と変わらないが、髪が伸び、背丈もレティと並ぶほどに大きくなり、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいるという見事な大人の女性だった。

特にチルノは気にしないようで、そんなルーミアを相変わらず遊びに誘っていたが、ルーミアは逆にチルノに、一緒に来るように誘っていた。その口調も、以前とは全く違う。どこか違和感を覚えながらも、まあ妖怪、そんなこともあるだろう、と特に気にしないこととした。チルノが本質的にルーミアだと判断しているのなら、そこ

にレティは口を挟むべきでないだろう。

そしてルーミアに誘われるままについて行くチルノに、なんだか放っておけなくて一緒に来た。その結果だ。

どうしてこうなった。レティは心中で、もう一度反芻する。

「貴様らか。新たに我の臣下になりたいという雑種は」

チルノとレティ、そして同じくルーミアに連れてこられたのであるう、蛸の妖怪リグルも並んで立っている前で、腕組みをしているのは黄金の鎧に身を包んだ男。

その男の傍に侍るように、忠誠を誓っています、と顔に書いてあるようなルーミアが従い、その逆隣には全てを諦めたかのようなミスティアが並んでいる。見事に、金色の男以外はチルノがよく遊ぶ妖怪たちだった。

「おー？ おまえすげー金色」

「ふん、雑種にもこの我の偉大さが分かるか。黄金とは王たるこの我にあしらえた色だ。だが雑種、口の利き方に気をつけよ。我が名はギルガメッシュ、貴様の王となる者だ」

「ギル？ おー、名前もかっこいいな！」

「偉大なる我の名は我に見合ったものであるべきであろう。それが

分かるとは、雑種にしては見る目がある。くくく、気に入った。貴様を我が臣下として認めよう。この我の威光に從うがいい」

何故かそんなチルノは、目の前にいるその男——ギルガメッシュに對し、何の気負いもなくそう話しかけている。そしてギルガメッシュの方も、チルノを気に入ったようだ。

だけれど——と、レティの体に思わず震えが走る。

——闇。

その身に抱えているのは、大いなる闇。まるでこの世全ての悪を飲み込んだかのような、底知れない沼のような深い闇。レティにはとても許容できるものではないほどに、その闇は巨大すぎた。

これは、近付いてはいけないものだ。レティの本能がそう警告する。今すぐ踵を返し、チルノを抱えて逃げなければならない。そうとさえ思わせる。

「名を名乗るがいい」

「あたいはチルノ！ サイキョーの妖精よ！」

「そうか、チルノよ。我が臣下である以上、その名に恥を塗るな。」

最強たる者たりえるとするならば、その力に慢心することなく精進せよ」

す、とギルガメッシュの目が、レティとリグルを捉える。

その眼差しは、やはり底知れない闇を孕んでいて、それでいて、途轍もない魅力があつた。

瞬間、理解する。その眼差しに、レティは抗うことなどできない、と。例えどのような甘美な果実があつたとして、この眼差しに、この存在に、適う物などあるまい、と。

「貴様らも名を名乗ることを許す」

「り、リグル・ナイトバグですっ！」

レティの隣から発せられたのは、まるで恐慌そのもののような声。歯の根は噛み合わずにガチガチと震えており、ギルガメッシュを見る目は恐怖そのもの。

そして、その恐怖ゆえに、抗えない——そんな感情が、まさしく顔に書いてある。

「……レティ・ホワイトロックよ」

どうしようもないほどの激情に心を支配される——そんな感覚すら

も過ぎる。レティの心を占めるのは、リゲルのように恐怖ではない。心臓は早鐘を打っているが、決してそれは恐れから来るものではない。かった。

例えるならば、畏怖。

研ぎ澄まされた日本刀のように、芸術的な美しさを醸し出しながらにして、誰かが握れば簡単に人斬り包丁と化すような。図り知れない魅力を持ちえながらにして、機嫌を損ねれば一瞬でこの首が飛ぶような危うさ。

それは――あまりにもレティにとって、甘美な果実だった。

「貴様らも、我が臣下となることを望むか？」

「ええ」

「は、はははははは、はい！」

レティは極めて冷静につとめて。リゲルは震えながら必死に。

お互いに行動は違えど、間違いなく肯定する。運命――そんなものを操る能力を持つらしい吸血鬼の話は聞いたことがあったけれど、運命などというものが存在するならば、それがレティとギルガメッシュを引き合わせた。そんなことすら考えてしまう。

ギルガメッシュは、どこか満足そうに腕を組み。

「ならば、貴様らを我が臣下として認めよう。我が名はギルガメッシュ、我の臣下である以上、我が名に泥を塗ることは許さぬ」

「それじゃあ……ギルと、そう呼ばせてもらってもいいかしら？」

「ふん、好きに呼ぶがいい。臣下に敬称を強いるほどに我は狭量ではない。少々が無礼は許そう。ただし、過ぎた無礼はその首が飛ぶと知れ」

「ええ、分かったわ。私はレティ・ホワイトロック。チルノの保護者みたいなものよ。私のことも好きに呼んでくれて構わないわ」

「良かるう。レティよ」

す、とレティは一礼する。そしてそれ以上は会話は必要ない、とばかりに、チルノの隣へ。

傲岸不遜な態度に、他者を見下すその姿勢。これにギルガメッシュの王たる雰囲気があれば、ただの偉そうな男に過ぎないだろう。だけれど、レティには分かった。ギルガメッシュは、『偉そう』なのではない。現実には、『王』なのである、と。

チルノの手前、遜るような姿勢を見せることができなかったため、ギルガメッシュに対して敬語を使うこともなく対応したが、実際には恥も外聞もなく忠節の姿勢を取りたいほどだった。

「それにリグル、だったか。貴様にも少々の無礼は許す。ただし、

能く仕えよ」

「は、ははは、はいっ、王様っ！」

「良い返事だが、少々多い。簡潔に済ませよ」

「は、はいっ！」

忠節を誓うルーミア。

純粹に慕うチルノ。

諦観に従うミスティア。

恐怖に震うリグル。

魅惑に惑うレティ。

今ここにギルガメッシュの、幻想郷の歴史を変える一軍は動き出した。

09（後書き）

調子に乗って連続投稿。

「最強たる者たりえるとするならば、その力に慢心することなく精進せよ」

自分で書いてて思った。

お前が言うな

10（前書き）

みんなの感想が俺の力になる！

調子に乗って連続投稿だぜ！
でもちょっと短め。

Side ルーミア

ミスティアが成り行きで臣下になり、こうして正式にチルノ、リゲル、レティの三人が臣下となった。その結果に、ルーミアは満足していた。

元々ルーミアは、先代か先々代か知らないが、博麗の巫女によってその力を封印されていた。闇を操るといふ能力に、それなりに長く生きてきたために、幻想郷でも大妖怪の一人とされていたからだ。更にルーミアは人食いの妖怪でもあったために、他の大妖怪のように折り合いをつけて生きていくことができなかった。それが博麗の巫女に、力を封印された理由である。

封印を受けてどれほどの月日が経たのか、ルーミアには分からない。何せつい先日、ギルガメッシュから封印を解除されるまで、本当に何も考えずに過ごしていたのだ。昼間は闇を伴ってふよふよと浮いて過ごし、夜は夜で夜闇の中をふよふよと浮いて過ごし、時にはチルノたちと遊ぶような、そんな生活。一体どれほどの時間を無為に過ごしていたのか、そう考えると、業腹ものである。

だが同時に、ルーミアは感謝の心すらも持っていた。もしも封印がされていなければ、ルーミアがギルガメッシュと出会うことはなかっただろう。食おうとして返り討ちに遭い殺されかけるといふ最悪のファーストコンタクトだったが、それでもルーミアは自分がギルガメッシュと出会えたことを、心から喜ばしく思っていた。

まずは、紅魔館を叩く——それが現在の、ギルガメツシュの方針。

新たに臣下となった三人を前に、ギルガメツシュは鷹揚に頷きながら言った。

「諸君、^{オレ}我以外に王を名乗る不屈き者が、紅魔館という場所にいるらしい。^{オレ}我を差し置いて王を名乗るなど、不敬にも程があるう。まずはその愚か者を誅殺し、その紅魔館とやらを得る。王が住むに値する場所ではないだろうが、城を持たぬ王というのも張子の虎よ」

くくく、と笑むギルガメツシュに、一同は黙したままで真剣に言葉を待つ。いや——チルノだけは「何言つてんの？」という風に首を傾げていた。レティがそんなチルノの頭を撫でながら、制する。

そこで、ギルガメツシュは肩をすくめて腕を広げた。

「だが、ただ臣下に働けと命ずるは王に非ず。我が臣下である以上、^{オレ}我はその働きは評価する。まず——ルーミア、前に出よ」

「は」

短く答えて、ルーミアは一步前に出る。

ギルガメツシュは虚空に手をやり、少しばかり悩む素振りを見せたのちに、その右手に一振りの剣を取った。

それはギルガメッシュの身長にも並ぶほどに、巨大な剣。刀身の長さにも、幅も同様に巨大。柄の長さとは明らかに不釣り合いな大剣であったが、それを握るギルガメッシュは、特に重さも感じていないような素振りを見せている。

「我が臣下となり、我の新たな臣下を四人連れてきたその忠節、大儀である。その働きを評価し、貴様にはこの財を与えよう。以後も忠勤に励め」

「は。勿体無いお言葉でございます、王」

片膝をつき、頭を垂れたままで、ギルガメッシュからその剣を受け取るルーミア。受け取った瞬間にとんでもない重さが来るかと思っただがそんなことはなく、むしろルーミアの腕力でも軽いものだった。

立ち上がり、ルーミアは大剣を両手で持ち、胸の前で立てて。

「王より賜りましたこの剣に誓って、必ずや御身の敵を葬りましょう」

「うむ。我が期待を裏切るでないぞ、我が剣よ」

そこでギルガメッシュは、チルノ、レティ、リグル、ミスティアの四人に向き直り。

「ルーミアはその功を評価し、褒美を与えた。しかし、貴様らは未だ何の成果も出しておらぬ。褒美を賜りたくば、功を上げよ。ゆくぞ、我が臣下らよ」

ギルガメッシュはマントを翻させ、その後ろに五人の臣下を背負い、紅魔館——これから攻め込む場所へと思いを馳せる。

「さあ——贗作の王を、誅殺するは今ぞ」

そして六人は、紅い館へと向かう。

ただ一つ——王に、勝利をもたらすために。

S i d e ? ? ?

霧の湖の付近を、彼女は一人で歩いていた。

まだ日が高い、昼間である。燦々と照りつける太陽は、霧の湖近くにある森の中にいるというのに、眩しいほどに輝いていた。思わず、彼女は目を細める。

「……天気がいいわねえ」

うふふ、と微笑む。耳を澄ませば鳥の囀りが聞こえ、野生の動物の鳴き声が聞こえる。とても平和な光景だった。

だけれど、そんな平和な光景でありながらにして、ありえないものが、その近くにある。

彼女は、それを目的にやって来たのだ。

「あら？」

森からやや出た場所で、集まっている六人の姿。

妖怪が四人に、妖精が一人。もう一人は……不明。黄金の鎧は太陽の光に、きらきらと輝いている。同じ色の髪はさすがに陽光を反射するようなものではないが、それでも光に照らされて透き通るような鮮やかさを見せている。

顔立ちも、悪くない。十分に美男子だと言えるだろう。それに、どこか神々しさもある。もしかすると、神の血が混じっているのかもしれない。

「ゆくぞ、我が臣下らよ」

マントを翻し、踵を返して——そのまま紅魔館の方向へと体を向ける。そしてそれに従うように、四人の妖怪と一人の妖精が、後ろにつく。

「さあ——贗作の王を、誅殺するは今ぞ」

確かに、それは神々しい。だけれど、同時に、それは底知れない闇を持っている。

まるで、この世全ての悪を飲み込んだかのような、ひどく淀んだ深い闇。まるで、汚泥の中にいるような。まるで、底なし沼の底のような。

「ああ——」

その背中を見て、唇を舐めて、彼女は呟いた。

「厄いわぁ」

10（後書き）

さて、今のところ感想ではフランを臣下にする方向になってきています。

まだまだ臣下リクエストは募集しておりますのでどうぞー。

11 (前書き)

PV40000、ユニーク5000突破！ありがとうございます！

Side リグル・ナイトバグ

黄金の王の背中を、五人が追ってゆく。

リグルは我知らず、溜息をついた。どうしてこうなったのだろう。何故か妙に成長して女性らしくなり、これまでと異なる口調で話すルーミアに、紹介したい人がいるとかなんとか言われてついに行ったのが始まりだ。

そこにいたのは、黄金の鎧を纏った男。大妖怪にも持ち得ないであろう雰囲気を持ち、あまりにも強い力を持つ存在だった。リグルは自分が、低級の妖怪であるということを知っている。そんな自分では、例え百人いたとしてもこの男には勝てない——そうとさえ思わせるほどに、恐ろしい男だった。

気づけば恐怖に体は震え、恐慌に頭は混乱し、なし崩しにこの王様——ギルガメッシュの臣下となってしまった。

ルーミアは恍惚とした表情で、ギルガメッシュの背中を追う。チルノとレティは並んで、時折笑顔を見せながらギルガメッシュの背中を追う。暗澹とした表情で、ただこの運命を呪いながら溜息をつくのは、リグルとミステリアの二人。

恐らくミステリアも、リグルと同じくなし崩しに成り行きで臣下になったのだろう。それでも、流れに乗って従うことしかできないのだ。もしも下手なことをすれば、ギルガメッシュの琴線に触れてこの首が飛ぶだろう。いや、むしろその前に、嬉々としてルーミアが

貰ったばかりの剣で斬り付けてくる気がする。

どちらにせよ、リグルとミステリアの未来は暗雲立ち込めていた。

しばらく歩き、紅魔館の時計塔が見えてきた。あとはこのまま真っ直ぐ進めば、紅魔館に到着するだろう。

ギルガメッシュは王を名乗る不屈き者——多分、流れるには紅魔館の主人のことだろう、その者を誅殺すると言っていた。

リグルもミステリアも、ギルガメッシュが恐ろしく強い奴だということは分かる。だから多分、人里の武芸者がたまに手合せを頼み込んでくるとかという拳法の達人、紅魔館の門番として名高い紅美鈴や、時間を止めるという反則的な能力の使い手にして紅魔館のメイド長、十六夜咲夜など、紅魔館の実力者を相手にリグルが立ち回ることはないだろう。

まあ、なんとかなるさ。いざとなったら隠れよう。

そんな風に、リグルが考えていると、唐突に目の前でギルガメッシュが足を止めた。

思わず前につんのめりそうになりながら、五人も共に止まる。

「……鬱陶しい」

ちっ、とギルガメツシュが軽く舌打ちをして、振り返り、虚空に目をやる。

「……どうなされましたか？ 王」

「ふん。先程から、身の程も弁えず殺気をぶつけてくる輩がいるのだ。場所はここより大分遠いが、この我^{オレ}の存在を知らずにして、戦いを挑んでくるとは愚か者よ」

「殺気……ですか？」

ルーミアが不思議そうに、ギルガメツシュの向いている方向と同じ方を見やる。そこには空が広がっているだけで、当然、何も無い。

ギルガメツシュは不機嫌そうに鼻を鳴らして。

「チルノよ」

「ほえ？」

レティと何やら話していたチルノに、唐突にギルガメツシュが話しかける。一体チルノに何の用だろう、とリグルは首を傾げた。

「貴様は妖精という種において最強だと言っていたな」

「うん。あたいはサイキョーの妖精だ！」

「ならばチルノよ。紅魔館のレミリア・スカーレットとやらと、貴様はどちらが強い」

「当然、あたいに決まってるわ！」

いや無理だから。リグルは心中で、そう突っ込む。

レミリア・スカーレットは吸血鬼であり、その力はチルノなんて足元にも及ばないほどだ。チルノが百人いても、とてもレミリアに勝つことなどできないだろう。

それなのに、チルノは当然自分が勝つ、という未来しか見えていない。

「ならばチルノよ、我^{オレ}は所用ができた。貴様に、王を名乗る不届き者の誅殺を任せよう」

「ぎ、ギル？ どうしてチルノにそんな……」

「黙れレティ。我^{オレ}はチルノに命じている」

嗜めようとしたレティを、ギルガメッシュは手で制す。もしも視線で人が殺せるならば、今の一瞥でレティは死んでいるかもしれない。

それほどまでに強い眼差しだった。

そんな目で見られたレティに、それ以上口は挟めない。

「……えつと、あたいがこーまかんのレミリアを倒せばいいの？」

「うむ。出来るな？」

「任せて！ あたいつたらサイキョーなんだから！」

「ふ。敵の首魁をくびり殺せという命に、それほどまでに笑顔で応えられる傑物は他にいるまい。チルノよ、我はお前に期待している。^{オレ}我の期待を裏切るなよ」

いや勘違いです違うんです王様その子は何も考えてないだけなんです。必死でリグルは止めようと口を出そうとするが、先程のレティを思い出すと何も言い出せない。

ただでさえ恐ろしいのに、あんな目で睨まれたその日には、恐怖で失神してしまうかもしれない。結果、リグルには口を嚙むことしかできなかった。

ギルガメッシュは鷹揚に頷いたのち、虚空に手をやって真つ赤な絨毯を取り出した。それを地面に敷く——と思いきや、それは重力に逆らうかのように、宙で波打つように止まる。一体どういう原理で絨毯が空を飛ぶのかと疑問に思うが、ギルガメッシュは特に何事もないうちにその絨毯に乗り、腰を下ろした。

「ではチルノよ、任せたぞ。ルーミア、供をせい」

「は。仰せのままに」

ギルガメッシュの乗った絨毯はそのまま宙に浮き、高度を上げて紅魔館とは逆方向に向かう。ルーミアもそれに従い、背中に大剣を預けて空を飛んだ。

そんな二人の姿を、言葉をなくして見送るリグルたち。

彼女らの向かう先は、紅魔館。吸血鬼にして悪魔の王レミリア・スカーレットが根城とする、幻想郷でも最強の一角。

あまりにも、ひどすぎる無茶ぶりだった。

「……どうしようかしらね」

頭を抱えて、レティが唸る。頭を抱えたいのはリグルも一緒に、隣では同じようにミステリアも頭を抱えていた。

唯一、そんな心境を分かっているのはチルノだけ。

「レティさん、ぶっちゃけあたしら、このまま逃げちゃってもいいですか？」

「ダメよ、ミスティア。私だって逃げたいくらいだけど、今逃げたらギルに何を言われるか分からないし。最悪、殺されるかもしれないわ。裏切り者として、ね」

ミスティアの魅力溢れる提案も、自分の首が斬られる未来がリアルに想像できてしまったため、棄却せざるをえない。

溜息をつく三人と、やたら元気なチルノ。妙に対照的な光景である。

「……ひとまず、行きましようか。とりあえず全員、死なない程度に頑張りましよう」

レティが諦めたように、そう全員を先導して歩き出す。明らかに勝てない戦いに、しかし臣下の身であるがゆえに抗うことなどできず、挑まなければならない。

スペルカードルールがある以上、死ぬことはないと思うけれど。

「うつ……なんでボクこんなところにいるんだろつ……」

リグルは涙目で、そう呟くことしかできなかった。

11（後書き）

オリジナル宝具解説

『ハリ・カラ・フサイン 天空駆ける波打つ赤』

アラビアンナイトで有名な空飛ぶ絨毯。三人の兄弟王子の長兄、フサインが発見した宝具。これに乗ることで自由に空を飛ぶことができる。真名開放は必要ない。

ちなみにハリ・カラはアラビア語で絨毯のこと。

アンケートについて

A 2 票

B 7 票

C 0 票

若干Bが優勢。とりあえずもう少し様子見てから決めます！

ギル様とルーミアが戦線離脱。さて、バカルテット - 1 + 1 はいけるのでしょーか。

12（前書き）

今晚にもう一話上げれたらいいなあ。

Side 紅美鈴

春眠曉を覚えずと言うが、眠くなるのは人間であれ妖怪であれ、多分神様でも一緒だと思う。だからまあ、生き物である以上は年中眠くなるのが当たり前であるため、眠くなる理由に「春だから」というのは少々間違っている気がする。そんな風にどうでもいいことを、いつも通りに欠伸混じりに門番をしながら美鈴は考えていた。

人里から霧の湖を隔てて、やや離れた位置に建っている紅魔館。美鈴は一応ここで門番を勤めているものの、それほど来客があるわけではない。ここ最近での来客など、頻繁に図書館から本を盗みに来る黒白の魔法使いか、美鈴との手合わせを目的とした人里の武芸者くらいのものだ。ちなみに黒白の魔法使いの侵入を美鈴が止めることができたことは、一度もない。普通は盗みに来るならばこそと隠れて来るものだが、あの霧雨魔理沙はそんな常識など持ち合わせていないようで、常に正門から堂々と侵入してくる。そして常に力業で美鈴を押しつけ、門を破って侵入するのだ。そのため、門番としての勤めが果たせていないとして常にメイド長からの説教を受ける羽目になる。

もともと、そんな魔理沙の来襲を除けば、平和そのものの仕事である。そもそも幻想郷におけるパワーバランスの一角である紅魔館にわざわざ攻め入ろうとする物好きもいないわけで、美鈴はいつも通りに平和に門番を勤めていた。

「おや？」

そんな日常の業務に、珍しい人物の来訪が目映る。

霧の湖の方からやって来たのは、よく美鈴のもとに遊びに来る氷精、チルノ。それにチルノの友人であるミスティアにリグル、それから保護者のような立場にいるレティの四人。

「やつほー、めいりーん」

「チルノではありませんか。珍しいですね」

笑みを浮かべて、美鈴はチルノの来訪を歓迎した。退屈な門番の業務、たまに遊びに来ては話し相手になってくれるチルノは、美鈴にとって有難い存在だった。

今日はどんな楽しい話を聞かせてくれるのだろう。前回は確か、よく一緒に遊んでいる緑髪の大妖精の話をしてくれた。その前は、悪戯好きの三人の妖精の話だったか。それにしても、今日は随分と大所帯で来ている。

「こんにちは、門番さん」

「い、こんにちはっ、美鈴さん！」

「こんにちはー」

レティ、リグル、ミスティアと、美鈴に挨拶をしてくる。それぞれ
チルノと遊んでいたり、保護者的な立場に立っている存在であるた
め、面識はあった。

「今日は随分と大勢ですね。何かあったんですか？」

「うん、めいりん。あたね、ちょっとレミリアを倒さなきゃいけ
ないんだ！」

「……はい？」

チルノの言葉に、思わず美鈴は首を傾げる。はて、チルノとレミリ
アお嬢様にどういう関係があるのだろう。しかも倒すとか、一体何
を言っているのだろう。

そんなチルノを慌てて抑えるのが、リグル。ミスティアは諦めたよ
うに頭を抱えており、レティは困ったような苦笑を浮かべていた。

なるほど、と美鈴は理解する。

多分霧の湖あたりで遊んでいて、またチルノの「あたいたらサイ
キョーね！」病が始まったのだろう。以前はその病気のせいで、守
矢の神を相手に戦ったとか聞いている。なんでも本人曰く、カエル
相手に勝てたからあいつもいけると思った、とのこと。いや、無理

だろう、と思いながら苦笑をした記憶があった。

まあ多分、話がエスカレートして、「あたいたらサイキョーだから紅魔館の主だって倒せちゃうわ!」とかなんとか言い出したのだろう。

「なるほど、チルノはお嬢様と戦いたいのですか」

「うん。まあ、あたいが勝つけどね!」

「ち、チルノちゃんってば!」

必死でリグルがチルノを制そうとしているが、効果はなさそうだ。

いくら子供の戯言とはいえ、挑まれた戦いは正々堂々と受けるのが、紅魔館の主レミリア・スカーレットという存在だ。そしてレミリアお嬢様は一切の手加減なく、それこそチルノが溶けるまで戦うだろう。

それはあまり、美鈴としても見たい光景ではない。

「しかしチルノ、お嬢様と戦いたいと言うならば、困ったことに私と戦わなければならないんですよ」

「へ? あたいはレミリアと戦っただけだよ。めーりんとは戦わないよ」

「いえ、私はこの紅魔館の門番ですからね。チルノがこの紅魔館に入るなら、まず門番である私を倒さないといけないんですよ」

チルノは何度か紅魔館に遊びに来ているが、屋敷の中に入れたことはない。美鈴は門番である以上、例えば自分の友人であっても、主の客人でなければ中に入れることはないのだ。

チルノは少し困ったように、眉を寄せる。

「あたい、めーりんとは戦いたくないよ？ 友達だから」

「それでも、お嬢様と戦いたいならば、この門を抜けないといけませんからね」

「じゃあ、あたいはどうすればいいの？」

「レミリアお嬢様と戦いたいなんて言わずに、私の話し相手になってくれませんか？ 門番も退屈なんですよ。チルノの話は面白いですからね」

よしよし、と美鈴は微笑む。こうやって論点をずらせば、チルノのことだ。レミリアお嬢様と戦いたいなんて言い出したことは忘れるだろう。

しかし、そんな美鈴の思いとは裏腹に、チルノは難色を示していた。

「でもね、めーりん。あたいはレミリアを倒さなきゃいけないんだ」

「どうしてそんなに、お嬢様と戦いたいんですか？」

「だって、ギルガメッシュがレミリアを倒せって言っただ。あたいに任せるって」

「ギルガメッシュ……？」

突然、チルノから出てきた人名。そんな名前は、聞いたことも――。

いや――美鈴の脳裏に、今朝博麗神社に向かうと言っていた紅魔館のメイド長、十六夜昨夜の言葉が過ぎる。

『おや、咲夜さん。お出かけですか？』

『ええ。博麗神社に行ってくるわ』

『博麗神社とは、また珍しいところに行くんですね。何かあったんですか？』

『ええ……なんでも、ギルガメッシュとかいう危険な外来人が来ているらしいのよ。その外来人を相手に、幻想郷の実力者で連合を組んで打ち倒そうとかなんとか、八雲紫が言っているのよね』

ギルガメツシュ。確かに咲夜はそう言っていた。ギルガメツシュ。確かにチルノはそう言った。

つまり――。

「成程」

チルノの頭を撫でていた手を引き、チルノに――四人に向けて、美鈴は構える。

ギルガメツシュという外来人が何者か、美鈴は知らない。だけれど、咲夜から聞いたのは『危険な外来人』という言葉だ。そのギルガメツシュが、チルノにレミリアを倒せと命令したらしい。

つまりこれは、チルノの病気などでは断じてなく、外来人に指揮された集団の、紅魔館への侵略行為。

「てつきり遊びに来たのだと思っていましたが、まさかこの紅魔館を侵略するつもりだったとは。この紅美鈴、驚きです」

「……はあ。チルノが上手く説得してくれるかと期待していたんだけれどね」

そう言いながら溜息をついているのは、レティ。

「残念ながらこの紅魔館の門番は、侵略者を通すほどに優しくはありません。お嬢様に危害を加えようとするならば、まずこの門番を倒していただきますよう」

腰を落とし、正中線を隠した横半身の構えをとる。人里では『武神』とさえ呼ばれている美鈴は、幻想郷でも近接戦におけるトップランカーである。その分遠距離から強力な力を放ってくる魔理沙のようなタイプには弱い、こと近接戦においては誰にも負ける気はしない。

「仕方がないわね……」

相変わらず溜息をつきながら、そんな美鈴の前に出てくるのは、レティ・ホワイトロック。

その身に寒気を纏わせながら、美鈴に合わせるように、腰を落とし構えて。

「門番さん、悪いけれど、足止めさせてもらうわ。チルノ、リゲル、ミステリア、私が門番を抑えている間に、館に侵入しなさい」

「ほう、なかなかの自信ですねレティさん。ですがこの門番、そう簡単に止められると思わないでいただきたいですね」

強い——レティの構えに、思わず美鈴は息を飲む。

見る限り、隙は見当たらない。恐らく近接戦では、なかなかの強者だろう。人里の武芸者の質も随分と落ちているため、これほどに流麗な構えを見たのは久しぶりだった。

「レティ！？ そんな、レティに任せてなんて！」

「だ、駄目よレティ！ あたしただけで紅魔館に攻め込むなんて無理よ！」

「いいから、行きなさい。これで侵入もできなかったとなれば、それこそギルに殺されるわよ」

三人はどことなく名残惜しそうにしながら、レティと対峙する美鈴を尻目に、紅魔館へと侵入を開始する。

門を飛び越え、三人が侵入したのを見届けて。

「……あら、止めなくて良かったのかしら？ 門番さん」

「あなたたちの中で、一番強いのはあなたですよ、レティさん。あの三人ならば、放っておいても大丈夫だと判断したまでです。一番強い奴は引きつけているわけですから、私に叱られる理由はありませんよ」

「そう……舐められたものね」

レティはくく、と微笑みながら、その身に纏った寒気を操り、右手に収束させる。

それはまさしく、冬の妖怪、『寒気を操る程度の能力』を持つ、レティ・ホワイトロックという妖怪の真骨頂。

「紅美鈴、推して参ります！」

「悪いけど、押し通るわ。門番」

そして二人は、激突した。

12（後書き）

アンケート中間発表

A	3 票
B	7 票
C	0 票

まだB優勢。これでA B同数になったらどうしよう。

さてレティの近接戦の強さですが、捏造です。原作では特に明記されていませんが、ぶっちゃけこの四人でめーりん止めれるのはレティくらいしかいないと思いましたので、ちょっと強くしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307ba/>

幻想郷征服録

2012年1月14日17時47分発行